

教職に就いて半年を経ての所感

くねらいと評価が一体化した授業の組み立てについて

岡谷市立小井川小学校 佐々木 悠介

この度私は、信州大学国語教育学会誌「信大國語教育第十三号」への寄稿のご依頼を受けた。去年まで大学に籍を置き、教師という夢を追うことだけを考えていた私にとって、信大教育学会誌に寄稿する先生方はあこがれであった。

そんなこともあって、今回のご依頼を受けさせていただき、そのことに感謝すると共に、恐縮するという不思議な感覚を覚えながら、筆をとることとなった。私がこの半年間で感じてきたこと、大学生活から積み重ねてきた実践的な観点での報告を述べていこうと思う。まだまだ不慣れで不十分な点もあるが、これから大学を巣立ち教員として羽ばたいていく後輩たちにも読んでいただければ幸いである。

私が教員という仕事を実際に行い、過ごしてきたこの半年間、大学の講義などで何度も行ってきた模範的な指導とは違い、多くの現実的な事柄とぶつかってきた。中でも大学生生活ともっとも違った点は、当たり前なことであるが、継続的に、実際に子どもたちを育てていかななくてはな

らない、ということである。

大学の講義において指導案を書いたり、指導計画を練ったりする際には、実際に子どもたちの前で授業を行うことは無い。教育実習でも指導案は書くし、実際に子どもたちと勉強をしていくことになるが、それはあくまで二ないし四週間のみで、継続的な、積み重ねを想定したものは無い。しかし実際教職について、教育現場で教えるとなると、一時間が非常に貴重になってきた。

昨今の教育改革により、各教科の時間数が減り、より密度の濃い内容が必要となってきた。国語も同様で、一時間ずつを大切にしなければ、予定されている単元をこなすの間に合わないし、そうでなくとも子どもたちにとって学びが薄いものになってしまいがちである。また、授業という折角の学びの機会を無駄にするのは惜しい。そういったことを考えた時、授業を組み立てていく中で基本的な点に立ち返らなくてはいけなかった。それは、毎時間における、子どもたちの学びの充実と、同時に、どんな点でどこまで学んでいるのかその評価の重要性である。私は、

この半年間、実際に教員という仕事を行ってきて、その中で、常に足りないと感じてきたことが一つある。それは、授業を行う際にもっとも基礎となるような事柄、すなわち、ねらい・手だて・評価の流れについての考えである。当たり前だが、この三つはお互いつながりあって初めて意味をなすわけだが、それらを上手くバランス良く授業に盛り込むのは非常に難しいことを実感した。

大学生活で学んできたことは、指導案の形式的な作り方や教師としての考え方が主であったが、その際に、私の中で、ねらい↓手だて↓評価という、見通しをもった流れまでは、あまり考えに入っていなかった。しかし実際に子どもたちを前にして、彼らとよりよい学びを進めていくことを考えると、それは必要に思える。おそらく講義の中で、先生方はそういったことをおっしゃっていたのでは・・・と思うと、なぜもっとしっかり講義内容を身につけていかなかったのだろうと悔やまれる。

ねらいを据えて、それを子どもにおろし、活動する姿から評価をする。述べるのは簡単だが、実際やってみると困難がつきまとう。「なぜこの事をするのか。」「ねらいに向けての手だてはどんなものがよいのか。」「この手だてはねらいに沿っているのか。」「この評価はねらいと照らし合わせて筋が通るのか。」など、挙げ出すときりが無い。

教師の行動・手だてはすべて計算されたものでなくては行けないが、それは何気ない一言（「さあ」「や」「さて」などの声かけ）にも及ぶ。教

師のすべての手だてが、ねらいに沿ったものでなくてはならない。そのためには、ねらいがはっきりと位置づけられたものでなくてはならない。ねらいが曖昧なまま、何となくで手だてを考えても、それらはすべて子どもにとって無意味で、結局教師の自己満足にしかならない。

ねらいや手だてだけでなく、評価も視野に入れて、授業を考えていく必要がある。本時におけるねらいから生まれた、ABCそれぞれの段階の子どもの姿を考え、そこから段階別の手だてが生まれる。（C評価の子にはこのような手だてで規準の力をつけ、A評価の子にはこのような手立てでさらに力を伸ばす。）自分の手だてによって、どれだけ子どもが成長したのか、その手だてが有効なのかどうかを検証する意味でも、細かな評価は必須である。

ねらい、手だて、評価。この三つは授業の骨組みとして存在しなくてはならず、三つは流動的に、かつお互いがつながっていないといけない。このバランスをいかに論理的に保てるかどうかが、私にとってのこれからの課題である。